次郎よ、大きな河になれ。

東宝

少年・青年・成人・家庭向き
文部省選定

次郎物語

加藤 剛・高橋惠子・伊勢将人・永島敏行・泉ピン子

西友(西武セゾングループ)・学研・キネマ東京提携作品

7月4日(土)—東宝系劇場にて全国一斉ロードショー

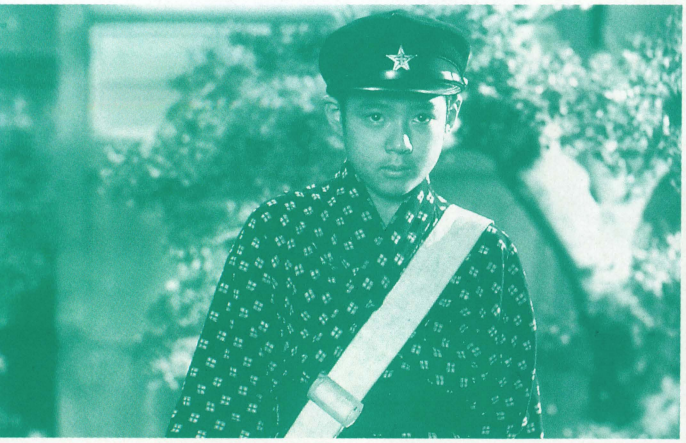
チケットのお求めは、チケットセゾンカウンター、またはサービスカウンターにて。

「次郎物語」のみどころ

「次郎物語」は里親のもとから実家に戻り、家風になかなかなじまずにいた次郎少年が、やがて家族の愛に触れ、母の死という試練を経て、大人になっていく姿を描いている。

この作品は、「私はふるさとをよく夢に見る。夢に出てくるふるさとは、きまって夏の景色である」というナレーションから始まる。やけつくような太陽、風にそよぐ水田、夏祭り、螢、堀割に開く蓮の花――など、映し出された佐賀の景観は、夢みるようにみずみずしく、懐しさにあふれている。

この「次郎物語」の最大の〝泣かせ役〟は、何といっても10歳の次郎に扮する子役の伊勢将人君だろう。撮影中、連日深夜におよぶハードなスケジュールがもとで風邪をひいたが、高熱をおして役作りに没頭、その集中力がスタッフ一同をびっくりさせたというエピソードの持ち主。感情移入のうまさは抜群で、例えば劇中、父親役の加藤剛から、病気の母親の看病がお前に本当にできるか、と問いただされるシーン。伊勢君扮する次郎が、感きわまって、そのつぶらな瞳に涙が見る見るたまっていく様子が、長回しのままとらえられている。少年の感情の純粋さが伊勢君の表情に集約されていて、思わず見る者は、深く胸をうたれることだろう。



伊勢君は、杉並区立中学の2年生で、劇団ひまわり所属。「次郎物語」以前も、「火宅の人」での子供時代の檀一雄役などを通じ、その演技力は高く評価されていた。ただし、出番の多さでは今回の「次郎物語」が最高。今年初頭に開かれた制作発表でも伊勢君は、台本に描き込まれた野生児・次郎の姿を自分にかさね、〝猿になったつもりで頑張ります〟と決意を語っていた。親とのふれあいがますます希薄になる現代の子供たちとは対照的に、〈はげしさ〉と〈まごころ〉をあわせもつ子供本来の姿を、この「次郎物語」で存分に見せてくれるはずだ。

もちろん、こまやかな情感にいろどられたこの「次郎物語」を支えているのは、伊勢君だけではない。父親役の加藤剛、母親役の高橋恵子、乳母役の泉ピン子など実力派ぞろいの共演者たちも、見事な演技を披露してくれる。そしてさらにつけ加えるなら、さだまさしの音楽。モチーフは、チェコの作曲家スメタナの代表的交響詩《わが祖国》中の〈モルダウ〉だ。この〈モルダウ〉は、チェコ1番の大河・モルダウの悠久の流れをスメタナが称えたもの。さだまさしはこの〈モルダウ〉のメロディを用いることで、水源から河口まで川のように成長していく少年の生き方をうたい上げている。実際、劇中でもこの〈モルダウ〉のメロディが幾度となく使われ、効果満点で情感を盛り上げる。そしてクライマックス、ついに母親の臨終の床に次郎が駆けつけるシーンで、さだまさし自身の歌うこの〈モルダウ〉のメロディを使った主題歌が、母をなくした次郎を励ますかのように感動的にかぶさる。このシーンでは、実際に試写会場でも客席からすすり泣きの声が聞かれたほどだ。

「火まつり」「人間の約束」に続き西友が製作したこの「次郎物語」は、夏休みの感動巨篇としていよいよ7月4日より東宝系劇場で公開される。

家族の愛、子供の心をみずみずしく描き、かならずあなたに深い感動と熱い涙を約束します。

「次郎物語」のあらすじ

時は昭和初め。母の病弱で里子に出されていた次郎は、乳母・お浜(泉ピン子)の愛情に包まれて、佐賀の自然のなかで自由に育てられた。実家からは次郎を迎えに何度も使いが出されたが、お浜に深い愛着を覚える次郎はそのたびに逃げ帰った。しかし、それも長くは続かず、ついにはお浜から引き離されてしまった。

次郎の実家・本田家は由緒ある士族の出だった。厳格な家風にふさわしくしつけようとする家族に、次郎はいたずらやけんかで反抗し、ますますひとりぼっちになっていく。

次郎の父・俊亮(加藤剛)は、次郎の置かれた立場や寂しさをよく理解し、父親らしい大らかな愛情とスキンシップで次郎に接した。それが次郎の心を少しずつ開かせていく――。

家庭になじまない次郎は母・お民(高橋恵子)の生家正木家や同級生の竜一の家に行くことで寂しさをまぎらわせた。ことに正木家の使用人・喜さぶ(永島敏行)は、よく次郎の面倒を見、理解ある兄貴分だった。竜一の姉・春子と喜さぶの恋と別れが、まだ大人の世界を理解できない次郎の前で進んでいく。

ある日次郎は、兄と弟がガキ大将たちにいじめられている姿を見て、猛然と年上のガキ大将に組みつき、かみついてけがを負わせてしまう。家族からは非難を浴びたが、父・俊亮は「正しいと思ったけんかは命がけでやらねばならん」と説く。そしてガキ大将の親との談判でも毅然として筋を通した。

やがて本田家にかげりがさす。次郎をかばっていた祖父(芦田伸介)が病死。家計は傾き、母・お民も病いに伏してしまう。次郎はお民の生家で、一生懸命に母の看病に打ち込んだ。次郎とお民の間に真の母子の愛がはぐくまれていく。

真夏――次郎のために病いをおして祭りの衣裳を縫いあげたお民は、自らの死を察し、炭鉱にいたお浜を探し出し、病床に呼んで、いままでの非礼をわびた。「子供って、ただただ、可愛がってやりさえすれば、よかとねえ……」しみじみと述べた後、お民は息を引き取った。死の知らせを次郎は祭りの踊りのなかで聞いた。母の縫った衣裳を着て……。

スタッフ

製作委員会代表……堤 清二
原作……古岡 秀人
……下村 湖人
(角川文庫・新潮文庫版「次郎物語」全五巻より)
脚本……井手 雅人
監督……森川 時久
音楽……さだ まさし
(フリーフライト・レコード/ワーナー・パイオニア)
作品提携●株式会社 西友(西武セゾングループ)
株式会社 学習研究社
株式会社 キネマ東京
設計●株式会社 荒木事務所
配給●東宝 株式会社

キャスト

俊亮(父)……加藤 剛
お民(母)……高橋 恵子
次郎(10歳)……伊勢 将人
喜さぶ……永島 敏行
宗太郎(母方の祖父)……高松 英郎
恭亮(祖父)……芦田 伸介
おこと(祖母)……大塚 道子
おなか(母方の祖母)……山岡 久乃
お浜(乳母)……泉 ピン子